

此く宣らば 天つ神は天の磐門を押し披きて
天の八重雲を伊頭の千別きに千別きて 聞こし
食さむ 國つ神は高山の末短山の末に上り坐し
て 高山の伊褒理短山の伊褒理を搔き別けて聞
こし食さむ 此く聞こし食してば 罪と云う罪
は在らじと 科戸の風の天の八重雲を吹き放つ
事の如く 朝の御霧夕の御霧を 朝風夕風の吹
き拂ふ事の如く 大津邊に居る大船を舳解き放
ち 艦解き放ちて 大海原に押し放つ事の如く
彼方の繁木が本を 焼鎌の敏鎌以ちて 打ち掃
ふ事の如く 遺る罪は在らじと 袂へ給ひ清め
給ふ事を 高山の末短山の末より 佐久那太理
に落ち多岐つ 速川の瀬に坐す瀬織津比賣と云
ふ神 大海原に持ち出でなむ 此く持ち出で往
なば 荒潮の潮の八百道の八潮道の潮の八百會
に坐す速開都比賣と云ふ神 持ち加加吞みてむ
此く加加吞みてば 氣吹戸に坐す氣吹戸主と云
ふ神 根國 底國に氣吹き放ちてむ 此く氣吹
き放ちてば 根國 底國に坐す速佐須良比賣と
云ふ神 持ち佐須良ひ失ひてむ 此く佐須良ひ
失ひてば 罪と云ふ罪は在らじと 袂へ給ひ清